

令和元年度

第53回群馬県小学校家庭科教育研究発表大会

研究主題

豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育

— 実生活との関連を図った、問題解決的な学習の工夫 —



渋川北群馬小学校家庭科研究部会

あ い さ つ

県内各地よりたくさんの先生方にご参加いただき、第53回群馬県小学校家庭科教育研究発表大会が、ここ渋川北群馬の地で開催できますことを、光栄に存じますとともに、心より感謝申し上げます。

平成29年3月に告示された新学習指導要領では、情報化やグローバル化といった社会的変化が加速度的に進展するようになってきていることを踏まえ、学校教育では、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で、目的を再構築することができるようにすることが求められています。

家庭科教育においても、子どもたちが生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をより良くしようと工夫する能力を育成することを目指すことが目標として改めて示されました。

このような中、渋川北群馬小学校家庭科研究部会では、平成30年度から小学校18校で研究を進めてまいりました。平成30年度は学習指導要領の改訂を受け、家庭科改訂の趣旨や要点、内容の改善点等をより深く理解するための学び合いの機会をもち、その趣旨を踏まえ、研修主題を「豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育」、副題を「実生活との関連を図った、問題解決的な学習の工夫」と設定して、研究の方向性を決めました。さらに、これからの家庭科学習に役立てるため、児童の家庭科の学習に関する興味・関心について、そして家庭科学習が実生活とどのように関連が図られているかについて、渋川北群馬の小学校4・5年生を対象として実態調査を実施しました。その結果、調理や製作は「楽しみ」と感じている児童がいる反面、困難さ・苦手意識から「あまり楽しみではない」と答えている児童もあり、この結果を踏まえて、実生活との関連を大切にしたい指導の在り方の重要性を再認識しました。

ささやかな研究ではありますが、この研究が児童の生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育み、群馬県小学校家庭科教育の推進につながれば幸いです。皆様からの忌憚のないご意見とご指導を賜りたいと存じます。

最後に、この研究を進めるにあたり、たくさんのご指導とご助言をいただきました群馬県教育委員会義務教育課教科指導係指導主事の佐野美幸先生、渋川・北群馬の教育委員会関係各位に心より感謝申し上げます。そして、渋川北群馬小学校家庭科研究部会と研究授業を提供してくださった吉岡町立明治小学校関係者の皆様方に心より御礼申し上げ、あいさつといたします。

令和元年10月24日

渋川北群馬小学校家庭科研究部会世話係校長 都丸 千寿子
(渋川市立橋小学校長)

目 次

I	研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・	1～6
1	研究主題	
2	主題設定の理由	
3	研究のねらい	
4	基本的な考え方	
5	目指す児童像	
6	研究の視点	
7	研究の見通し	
8	研究の組織	
9	研究の経過	
	<アンケート調査結果から>	
II	実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・	7～12
1	視点1	
2	視点2	
3	視点3	
III	成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・	13
1	研究の成果	
2	今後の課題	

I 研究の概要

1 研究主題

「豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育」
—実生活との関連を図った、問題解決的な学習の工夫—

2 主題設定の理由

来年度より本格実施される新学習指導要領では、21世紀を担う子どもたちに身に付けさせたい力は、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、よりよい社会と幸福な人生の創り手として、未来社会を切り拓くための資質・能力」であると示されている。

家庭科においても、家族・家庭生活の多様化や消費生活の変化に加えて、今後の社会の急激な変化に主体的に対応することができる資質・能力を目指して、小学校家庭科の目標を「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成すること」とし、その資質・能力を(1)「家族や家庭、衣食住、消費や環境などについて、日常生活に必要な基本的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付けるようにする」、(2)「日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う」、(3)「家庭生活を大切にしている心情を育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う」と、具体的に示された。また、家庭科は生活との結びつきが強い教科である。これからの家庭科の学習の中では、生活の課題に気付き、解決の見通しをもち、主体的に学ぶ姿勢をもつこと、課題の発見や解決に向けて他者とのやり取りを通して対話的に取り組むこと、そして解決に向けた一連の学習活動の中で知識の質的な高まりや技能の習熟が図られたりするよう学習を進めることが大切である。

そこで、渋川北群馬小学校家庭科教育部会では、アンケート調査による実態把握を行うとともに、「はばたく群馬の指導プラン」や「はばたく群馬の指導プラン—実践の手引き—」を活用しながら授業実践を進めてきた。児童へのアンケート調査<資料1>によると、「家庭科の学習が楽しみ」と答えた児童は、4年生が228名中212名(93%)、5年生が275名中246名(89%)と高い割合で、その理由として、調理の学習や被服の製作実習が好き・楽しみにしているという児童が多かった。しかし、<資料2>の「1食分の献立作り」については、「家でよくやっている」児童は、4・5年合計503名中40名(8%)と大変少なく、「できるようになりたいこと」でも、135名(27%)と少ない。調理に関しては、お手伝いはするが、自分で栄養バランスを考え、献立を考えるという経験は少なく、親任せであることが分かった。今後は、栄養バランスを考えて食べることの大切さに気付き、自ら考えて食生活を送る意欲や態度を育てることが大切であると考えられる。

以上のことから、渋川北群馬小学校家庭科研究部会では、食物領域に焦点を絞り、「課題に気付くための支援の工夫」「問題解決的な学習過程の工夫」「家庭や地域と連携し、学んだことを生活に生かすための支援の工夫」を視点とし、「実生活との関連を図り、問題解決的に学習できる児童」の育成を目指して、本主題を設定した。

3 研究のねらい

生活の中からの課題設定、実践的・体験的な活動の取入れ等、学習過程を工夫したり、家庭や地域

と連携し学んだことを生活に生かすよう支援を工夫したりすることによって、「生活の中から課題を見出し、課題を解決し、学んだことを実生活に生かせる児童」が育成できることを授業実践を通して明らかにする。

4 基本的な考え方

(1)「豊かな心と実践力を育み、未来を拓く」とは、

「豊かな心」とは、家族の一員として家庭生活を大切にできる心、家族や地域の異なる世代の人々と共に生きる力と捉える。

「実践力を育み、未来を拓く」とは、生活の中から課題を見付け、基礎的・基本的な知識及び技能を生かした実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する態度を身に付け、これからの生活に生かしていくことである。

(2)「実生活との関連を図った、問題解決的な学習の工夫」とは、

生活をよりよくするため、自らの生活を見直し、課題を見付けたり、比較検討して解決方法を考えたりする。その課題を解決するために基礎的・基本的な知識及び技能を生かした実践的・体験的な活動を取り入れ、実生活に生かす意欲につながるよう、家庭と連携して学んだことを生活に生かすよう工夫した学習過程である。

5 目指す児童像

○生活の中から課題を見出し、課題を解決し、学んだことを実生活に生かせる児童

6 研究の視点

<視点1>課題に気付くための支援の工夫【つかむ】

<視点2>問題解決的な学習過程の工夫【追究する】

<視点3>家庭や地域と連携し、学んだことを生活に生かすための支援の工夫【実践に生かす・まとめる】

7 研究の見通し

<視点1>課題に気付くための支援の工夫【つかむ】

○自分の生活を見つめ、身近な生活の問題に気付かせるための工夫

○身近な生活の問題から題材を貫く学習課題の設定の工夫

<視点2> 問題解決的な学習過程の工夫【追究する】

○活用できる知識及び技能を習得させるための実践的・体験的な活動の工夫

○知識及び技能を習得させるための問題解決的な学習指導の工夫

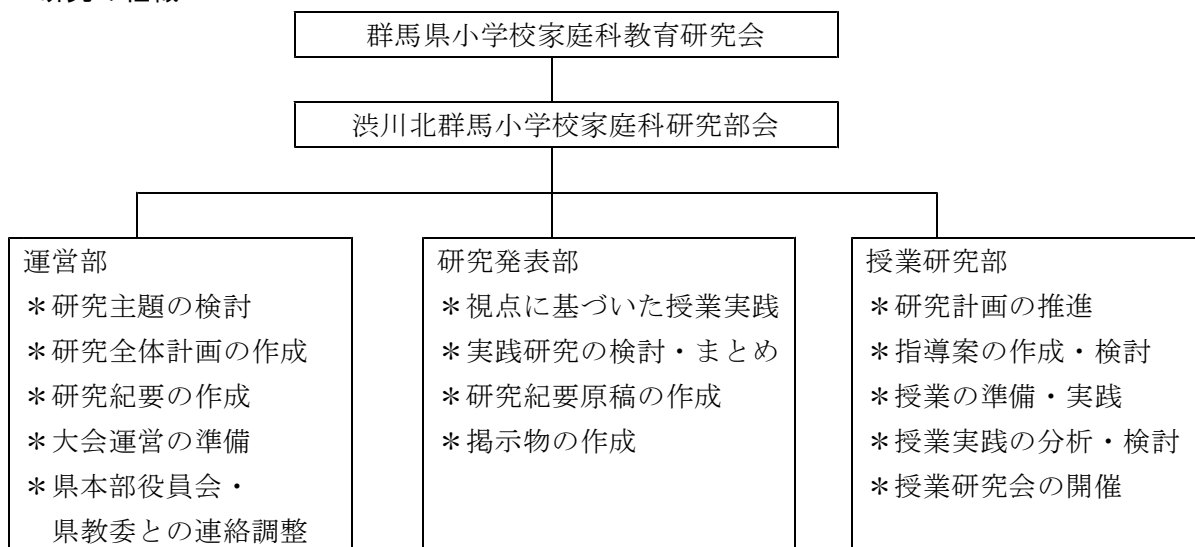
<視点3>家庭や地域と連携し、学んだことを生活に生かすための支援の工夫 【実践に生かす・まとめる】

○家庭や地域へ働きかける意識を高める工夫

○家庭や地域とつながりをもつための工夫

以上の1～3に視点をあてた実践を行うことで、生活の中から課題を見出し、課題を解決し、学んだことを実生活に生かせる児童を育成することができるであろう。

8 研究の組織

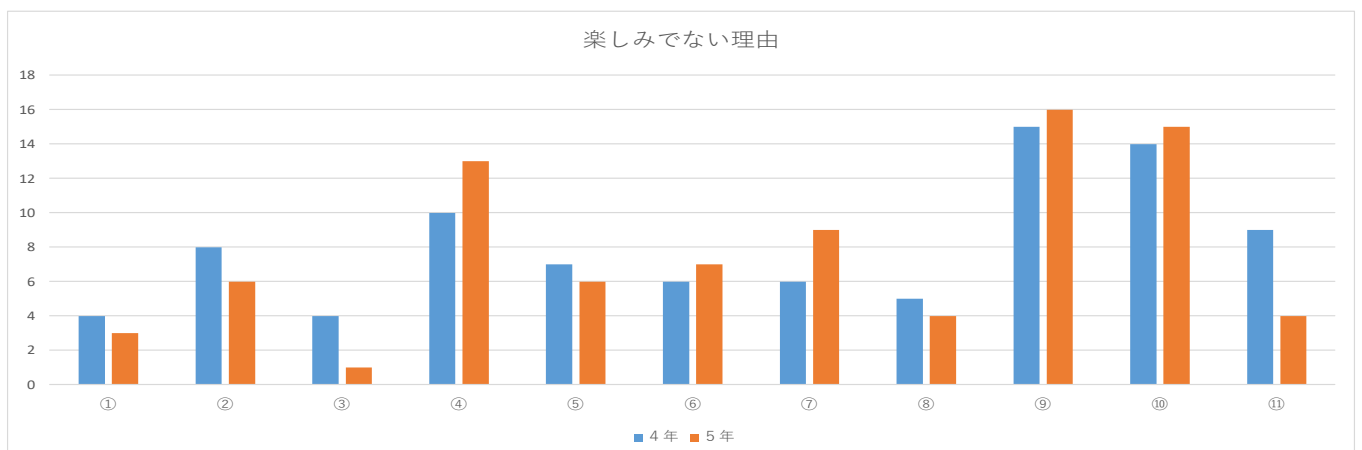
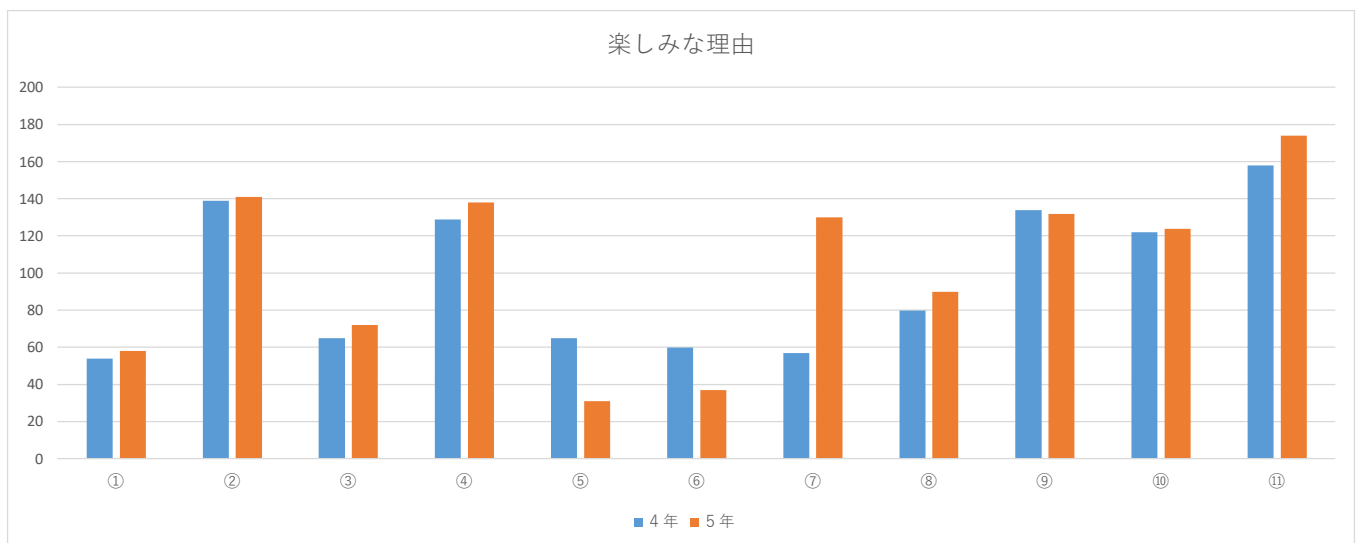
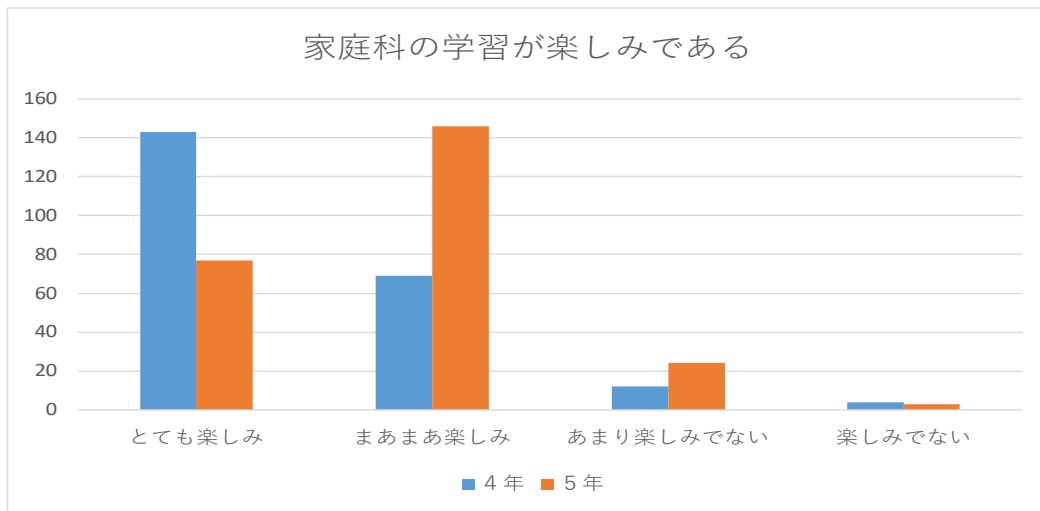


9 研究の経過

月	主な取り組み
平成30年度	4 ○第1回家庭科研究部会 組織づくり・計画づくり
	6 ○県家庭科研究部会理事研修会参加
	7 ○第2回家庭科研究部会 研究主題・研究組織づくり
	8 ○研究部運営部会
	9 ○「問題解決的な学習の授業づくりについて」「新学習指導要領（小学校家庭科）の改定のポイントについて」（県教委佐野指導主事作成資料）を学ぶ
	9 ○第3回家庭科研究部会 研究内容の確認・活動計画
10 ○県小学校家庭科教育研究発表大会参加（みどり市立大間々東小学校）	
11 ○第4回家庭科研究部会 指導案検討	
	○第5回家庭科研究部会 研究授業及び授業研究会〔5年〕
	○第6回家庭科研究部会 研究授業及び授業研究会〔6年〕
平成31年度	4 ○第1回家庭科研究部会 組織づくり・計画づくり、一次案内検討
	5 ○県家庭科研究部会理事研修会参加
	6 ○第2回家庭科研究部会 紀要原稿内容検討、一次案内決定
	8 ○第3回家庭科研究部会 紀要原稿最終検討、最終案内検討、指導案検討
	9 ○第4回家庭科研究部会 研究授業指導案検討、発表用パワーポイント検討
	10 ○第5回家庭科研究部会 県小学校家庭科教育研究発表大会準備
令和元年	10 ○県小学校家庭科教育研究発表大会（吉岡町立明治小学校）
度	11 ○県小学校家庭科教育研究発表大会のまとめ、反省、成果と課題

《アンケート集計》

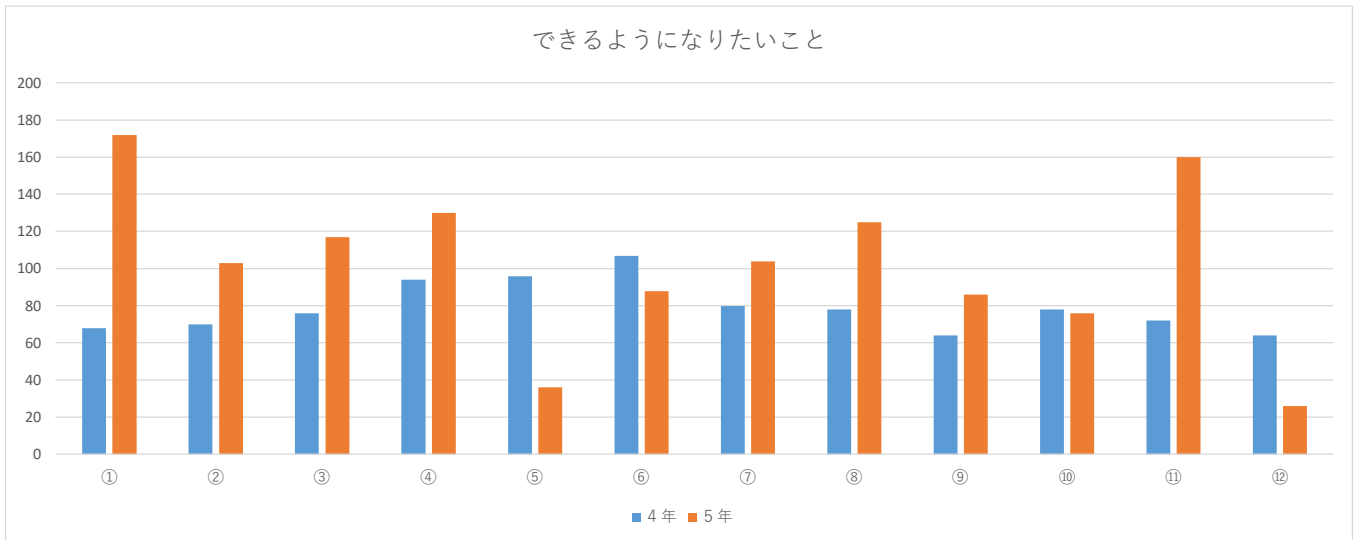
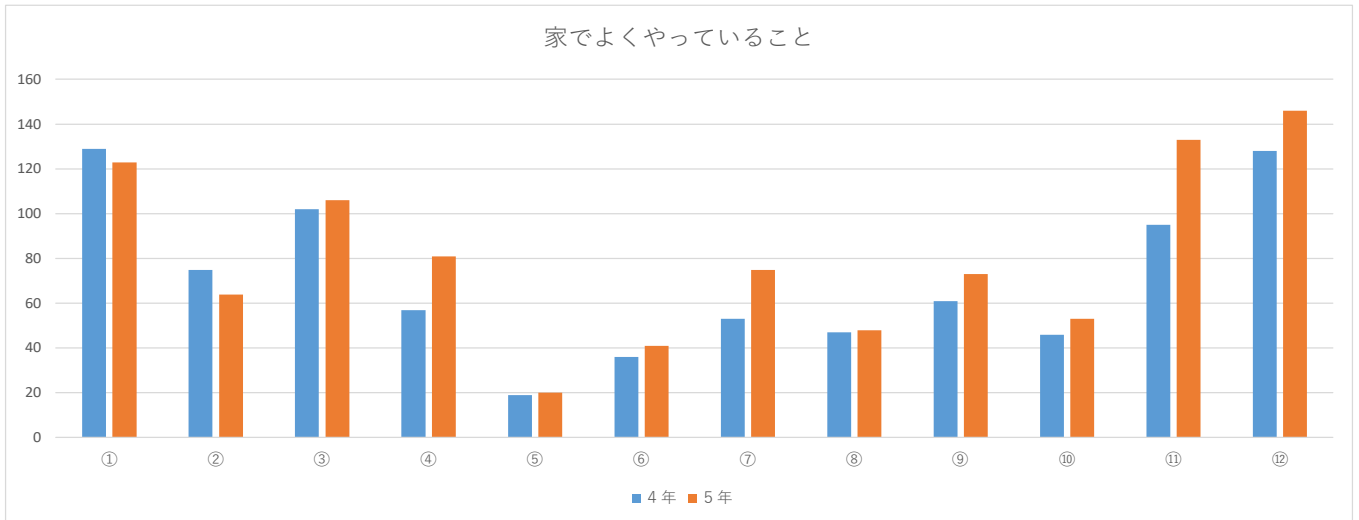
＜資料1＞



・・・ <資料1> 選択項目・・・

- ①家庭の仕事や自分の役割について学べる
- ②包丁の使い方や調理の仕方を学べる
- ③栄養のことを学べる
- ④手ぬいやミシンぬいを学べる
- ⑤衣服の着用やせんたくの仕方を学べる
- ⑥住まい方やかんきょうなどについて学べる
- ⑦整理整頓やそうじの仕方を学べる
- ⑧ものやお金の使い方を学べる
- ⑨ミシンで作品を作ること
- ⑩手ぬいで作品を作ること
- ⑪調理実習をすること

<資料2>



・・・ <資料2> 選択項目・・・

- ①包丁で野菜を切る
- ②コンロを使う
- ③ゆでる・いためる調理
- ④ご飯とみそ汁の調理
- ⑤1食分（朝食や夕食）のこん立てづくり
- ⑥手ぬい・ミシンぬい
- ⑦衣服の洗たく
- ⑧一人で買い物
- ⑨よごれにあったそうじ
- ⑩かんきょうを考えた生活
(ごみの分別、リサイクル)
- ⑪身の回りの整理整頓
- ⑫家族との団らん
(家族でなごやかな時間を過ごす)

<アンケート考察>

- ・家庭科の学習が「楽しみ」（とても楽しみ+まあまあ楽しみ）と答えた5年生は89%で、「楽しみ」と答える4年生は93%いた。これは4年生はこれから始まる家庭科の学習に興味や期待感が大きいと思われる。また5年生は1年間近く学習を行って、苦手意識が出てきた児童もいるのではないかと考えられる。
- ・調理をすることや手縫い、ミシン縫いで作品を作ることは「楽しみ」と感じている児童が多いが、「家庭の仕事や自分の役割」、「衣服の着方や手入れ」、「住まい方や環境の学習」については、関心が低いことが分かった。一方で、調理や手縫い、ミシン縫いで作品を作ることは、「あまり楽しみでない」理由としても挙げられている。調理や製作は、家庭科学習の魅力である一方で、児童にとっては困難な学習なのではないかとも考えられる。
- ・家でよくやっていることでは、4・5年とも「包丁で野菜を切る」、「ゆでる・炒める調理」、「身の回りの整理整頓」、「家族との団らん」が多かった。反面、「1食分のこん立づくり」については、大変少ない。また、できるようになりたいことの項目では、「包丁で野菜を切る」「コンロを使う」「ゆでる・炒める調理」「ご飯とみそ汁の料理」に関して選択した児童は多いが、「1食分のこん立づくり」を選択した児童は少なかった。これらのことから、食事にかかわる手伝いをしたり関心はもっているが、「1食分のこん立づくり」をできるようになりたいと考える児童は少なく、栄養を考え計画的に調理するところまでは考えが及んでいないのではないかと考えられる。
- ・以上のアンケート結果から、今後の家庭科学習の中で、食物領域への児童の興味関心を生かす中で、栄養バランスを考えて食べることの大切さに気づき、自ら考えて食生活を送る意欲や態度を育てることが大切であり、繰り返し学習し、実践できるよう計画的に機会を設けていくことが必要であると考え。また、住まい方、製作や着方の学習は、実生活に関わりのある実験や実習を取り入れ、必要感を持って学習を進められるようにするなど、学習過程の工夫が必要であり、家族の一員として主体的に協力する意欲や態度を育てることも大切であると考え。

* 調査期間：平成30年12月

* 調査対象：渋川市2校、北群馬郡2校の5年生（275名）及び4年生（228名）



(実践事例1)

視点1 課題に気付くための支援の工夫

渋川市立金島小学校 高橋裕子

1 研究の視点

学習指導要領、内容B「衣食住の生活」(3) 栄養を考えた食事を取り上げ、食事という、日常生活において必要不可欠なものに目を向け、そこにある問題に気づき、課題を設定するための支援の工夫を行っていく。

2 課題解決のための手立て

(1)自分の生活を見つめ、身近な生活の問題に気付かせるための工夫

食生活についてのアンケートをもとに、自分の日々の食生活に目を向け、学習の中で活用していくことにより、食べることの意味や自分の食生活における課題に気付かせる。

(2)身近な生活の問題から題材を貫く学習課題の設定の工夫

給食の献立がどのような食品の組み合わせで作られているかを確認し、偏った食事の改善策を話し合うことで、食べるときに大切なことや色々な食品をバランスよく食べることが大切であることに気づき、栄養バランスのとれた食生活を考えようとする。

3 授業実践 題材名「食べて元気に」(5学年)

(1)自分の食生活を振り返る

題材の学習の導入として児童へのアンケートを実施した。アンケートでは、毎日の夕食や朝食、休日の昼食(給食との比較のため)で食べている食品についてと、併せて「栄養素」について知っているかを質問した。食事についてのアンケート結果を児童と分析し、「夕食は家族が調理したものを家族みんなで食べることが多いから、色々な物を食べるけれど、朝食は忙しかったり、休日の昼食は自分で簡単に食べてしまいがちだったりして、単品での食事(「おにぎりだけ」「カップ麺だけ」など)になってしまうことも多いということを確認し合った。

また、栄養素については、知識のある児童はほとんどいなかったが、給食の献立表に記載された食品の分類に関係していることに気付いた児童は多く、前出のアンケート結果について、多くの食品が使われている給食と比べると、単品だけの食事は望ましくないのではないかと考えた児童が多かった。

(手立て1)

(2)食べるものの意味について考える

授業の冒頭、児童に「なぜ食べるのか」という問いを投げかけた。まず最初に「死んじゃうから」と答えた児童の声をきっかけに、T「どうして死んじゃうの?」S「おなかかがすくから」、T「お腹がすくとどうしてこまるの?」S「エネルギーがたりなくなっちゃう」、T「エネルギーってどういうこと?」S「車のガソリンみたいなもので、満タンじゃないと動けない」T「じゃあ、とにかく何か食べればいいのか?」S「何でもいいわけじゃない」T「そうなんだ。そうしたら、何が大切なのかな?考えてみよう」というやりとりから「食べるときに大切なことを考えよう」という授業のねらいへと導いた。

児童のアンケートをもとに作成した食事の写真(「牛乳」「カップ麺」「焼き肉」「おにぎり」)を掲示し、給食の献立と比較することで、その食事が栄養的に偏っていることに気付かせ、どうしたらそれらを望ましい食事に改善できるかを話し合った。配布した食品のカードを付け加えながら、改善策を出し合い、「牛乳」+「サンドイッチ」、「カップ麺」+「野菜サラダ」、「焼き肉」+「ご飯」+「みそ汁」、「おにぎり」+「みそ汁」などの組み合わせを考えることができた。また、なぜその食品を付け加えたのかについても話し合い、ワークシートに記入した。

授業の終末に、再度「なぜ食べるのか」という問いを投げかけた。この問いに対しては「色々な物を組み合わせるとよい」「給食のように赤・黄・緑に気を付けて食べた方がいい」という答えが出され、栄養を考えて食べることは、生きるためや空腹を満たすためだけではなく、健康を保ち、健



図1 改善策を話し合う

やかに成長していくためにとても大切であることに気付かせることができた。(手立て2)

(3) 五大栄養素とみそ汁作り

食事をする時には栄養のバランスが大切であることを確認した後、「五大栄養素」について理解させ、それらは相互に関連をもちながら健康の保持や成長のために役立っていることを確認した。このことは、給食の献立表に分類して表記されている「赤」「黄」「緑」の食品分類の根拠となっていることに気付き、毎日食べている給食が栄養のバランスについてよく考えられているものであるということを理解することにつながった。そして、その後の題材計画であるみそ汁作りにおいても栄養のバランスを考えた食品の組み合わせにしていこうという課題意識をもつことができた。(手立て2)



図4 児童が話し合った改善策

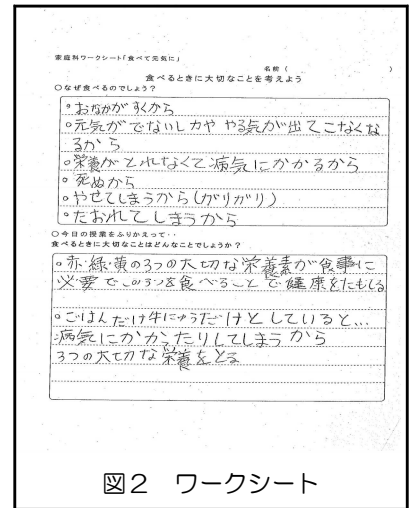


図2 ワークシート

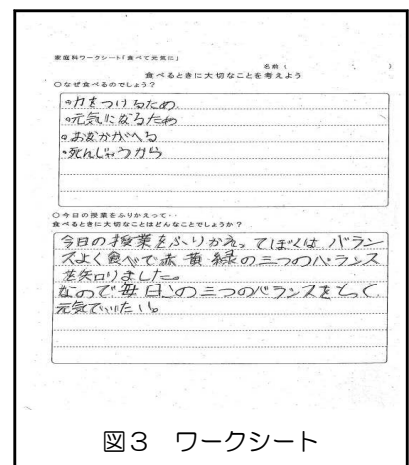


図3 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果

- 身近な食事を取り上げ、給食と比較しながら考えたことで、児童も課題に取り組みやすかった。
- 児童のアンケートをもとに数種類の食品を写真資料として準備したことが話し合いを充実させる上で有効だった。
- 本実践において学んだことが給食献立への関心と結び付き、五大栄養素のバランスを考えて食事しようという意識をもって生活する児童が多く見られるようになった。
- 題材後半の学校や家庭でのみそ汁作りの宿題では、多くの児童が栄養素の組み合わせのバランスを意識して、実践することができた。

(2) 課題

- 「食べることについて考える」場面の授業において、話し合いの結果を全体で共有する場面で、児童の気付きをもとに比較・検討する時間が十分にとれなかった。班の数や食品の貼り方を精査し、食品を選んだ理由を班ごとに説明させていくための時間的な余裕を生み出す必要がある。
- 給食の献立で考えられた栄養のバランスに着目しながら、自分の食生活を振り返ることを意識付けていくことも、バランスのとれた食生活を考えさせる上で有効であると考えられる。

(実践事例2)

視点2 問題解決的な学習過程の工夫

渋川市立小野上小学校 内海弘恵

1 研究の視点

生活の中から課題を見付け、その解決を図って生活をよりよくすることができるようにするためには、題材計画が児童の生活からスタートし児童の生活に返って学習が実生活につながるように立案することが必要である。そこで、題材の導入で、一連の学習で学んだり身に付けたりしたことを自分の生活で実践することを最後に位置付けた学習計画を児童と共に立て、児童が「家で挑戦する」というゴールに向かって主体的に知識及び技能を習得しようとするような問題解決的な学習過程を工夫していく。

2 課題解決のための手立て

(1)活用できる知識及び技能を習得させるための実践的・体験的な活動の工夫

児童が生活の中から問題を見だし、見いだした問題を元に児童と共に題材を貫く課題を立てる。さらにその解決のために必要な知識・技能・実習を考えて学習計画を立案する。知識及び技能の習得のために、「お試し実習」や「比較観察」など適切な実践的・体験的な学習活動をできるだけ入れるよう工夫する。また、児童と立案した題材の学習計画を毎時間の冒頭に提示し、本時の位置付けを児童と共に確認することで、題材のゴールに向かって本時は何を考えたり習得したりすればよいのかという学習のめあてをつかんで主体的に取り組むことができるようにする。

(2)知識及び技能を習得させるための問題解決的な学習指導の工夫

食生活をよりよくしようとする実践的な態度を育成するためには、実践しようという意欲を支えるための基礎的な知識・技能の習得が不可欠である。そこで、児童が家庭での実践に向けて不安に感じている部分を洗い出し、その解決方法を自分たちで考え、「授業での学習」「家庭での練習」「調理実習での試し」も自分たちが考えた学習計画の中に取り込んで位置付けることで、学習してきたことへの達成感や自信をもって実践に向かえるようにする。また、児童同士で互いの考えや取り組みを伝えたり見合ったりして意見交流するという協働的な学びの場を設定し、自分では気付かなかった問題点を発見したり改善策を見いだしたりし、自らの考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

3 授業実践 題材名「くふうしようおいしい食事」(6学年)

(1)題材を貫く課題「めざせ！我が家のミニシェフ！！」と学習計画の立案

本題材は、5年6年での「栄養バランスを考えた食事」「切る・ゆでる・いためるなどの技能」の学習の集大成であることを伝え、「これまで学習してきたことを生かして、家族のための1食分の献立を考えて家族にごちそうしよう」という題材を貫く課題を児童と共に設定した。さらに、この課題を分かりやすく、「やりたい」「面白そう」と感じて意欲的に取り組めるよう、『めざせ！我が家のミニシェフ！！』というテーマ名を設定した(手立て1)。

その後、「ミニシェフになるために、どんな学習や練習が必要か」と問いかけて、各自が家での食事作りで不安なことや自分に必要だと思う学習や練習(実習も含めて)を考え、それを出し合って分類・整理し、学習計画を立案した(手立て1及び2)(図1)。

児童は、それぞれによく考え、

- ・皮むきが苦手だから、皮むきの練習が必要。
- ・栄養のバランスは大事だから、5年生での五大栄養素の学習を復習したほうがよい。
- ・自分が考えた献立では不安なので、栄養バランスが整った献立になっているかを友達と確認し合いたい。

などの意見が出され、家での練習や調理実習も「ミニシェフとして冬休みに家族にごちそうするために自信を付けるための活動」という位置付けで学習計画を考えることができた。この学習計画は毎時間の板書で提示する(図1)ことで、本時がどの位置付けにありゴールに向かうために何を学び取る時

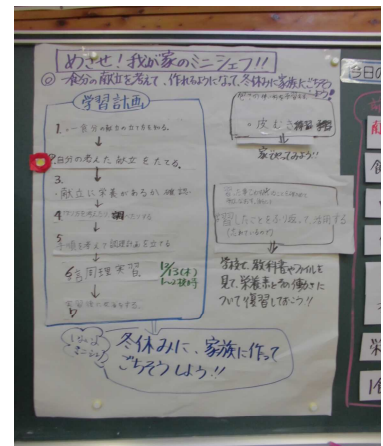


図1 児童の意見を基に作成した学習計画

間なのか明確になると共に、自分たちが考えた計画なので、意欲的に学習することにつながっていた。

(2)「追究する」過程における、基礎的知識・技能の習得のための実践的・体験的な活動及び協働的な学び

児童と共に立案した学習計画の中に、「家ででの皮むき練習」と「各自で5年生での五大栄養素の学習の復習をする」ということが盛り込まれた。そこで、「めざせ調理の達人—包丁での皮むき名人へのステップ」というカードを作り（図2）、調理実習までに各自が家でリンゴとじゃがいもの皮むき練習に取り組んだ（手立て2）。「家で上手においしい食事を作れるようにするための事前練習の実習だから、それまでに皮むきをマスターしなくては」という気持ちで、全員が積極的に取り組んだ。調理実習後の振り返りにも、「家で練習をしたからじゃがいもの皮むきが前より上手くできた」など、取り組んだことへの達成感や自信がうかがえる言葉が多くあった。また、調理実習での技能習得の一助として、地域の学習ボランティアの方をお願いした（図3）。教師とボランティア講師の2名で実習にあたることで、児童一人一人の質問や調理の様子に対応することができ、調理のこつをアドバイスすることで「なるほど」「そうかこうすればいいのか」「やったあうまくいった」など、児童が納得して身に付けていく反応が得られた。

協働的な学びの場としては、「1食分の献立を考える練習」「家族のための献立作成」「調理実習での試食」の場面などで、互いの考えや調理したものを発表したり見せ合ったりし、気付きを交流した（手立て2）。付箋に書いて友達のワークシートに貼ったり、その友達へのアドバイスに対する疑問点やもっと詳しく知りたいことを聞いたりして、自分の考えを広げたり深めたりできるようにした（図4）。

(3)学習の最終ゴールとしての「家族にごちそうしよう！」

題材の1時間目に『家族のための献立を考えてごちそうしよう！めざせ我が家のミニシェフ！！』という課題を設定した（手立て1）ので、児童は自然と冬休みに家族にごちそうするという目標として受け止め、一連の学習に意欲的に取り組んだ。題材の冒頭から、調理実習も「家ででの実践のためのお試し」という位置付けになっており、「調理実習→注意することの確認・改善点の修正→冬休みに実践」という流れが児童の中に生まれた。そこで冬休み前に、実習前に作った調理計画を見直して必要な修正をした「レシピカード」を作成する活動を組み込んだ。また、お互いのレシピカードも見せ合い、「友達のレシピカードで欲しいものがあったらコピーをしますよ」と教師から投げかけたところ、ほとんどの児童が友達のレシピカードも数枚ずつ持ち帰った。冬休みには全員が自分のレシピで「ミニシェフ」実践をし、「そのほかに友達のレシピでも作りました」という児童もいた。また、3学期になってからの休日に「〇〇さんのレシピで家族に昼食を作りました」という児童もおり、意欲的に実践する姿が見られた。

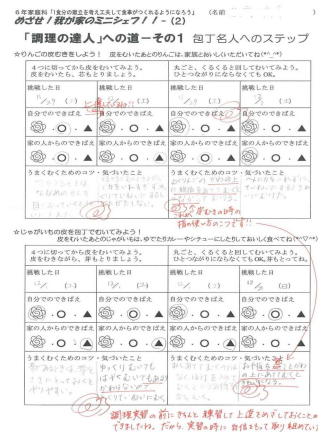


図2 包丁での皮むき名人練習カード



図3 地域の調理講師ボランティアの活用



図4 互いの調理計画を見て気付きを交流

4 成果と課題

(1)成果

- 題材を貫く課題を、『めざせ！我が家のミニシェフ！！』という児童の言葉で設定し、そのための課題解決の方法を考えて学習計画を立案したことで（手立て1）、ゴールを見据えて毎時間の学習に意欲的に取り組んで既習の知識を活用したり技能を積み上げたりする様子が見られ、主体的な学びの姿に迫ることができた。
- 「つかむ」過程での題材を貫く課題設定と学習計画作り（手立て1）、「追究する」過程での実践的・体験的な活動及び協働的な学び（手立て1及び2）、「実践に生かす・まとめる」過程における家庭での実践という問題解決的な学習過程（手立て2）をとることは、児童自らが知識・技能の習得や既習内容を活用して解決しようとする意欲や主体性の喚起につながることを改めて実感した。

(2)課題

- 問題解決的な題材構成をするに当たっては、児童にいかに関生活の中から問題を見いださせるか、そして見いだした問題を基に題材を貫く課題が立てられるかがポイントと言える。食生活は児童の興味関心が高く、問題点や実践の方向性も見付けやすかった。他の領域においても実生活との関連を図った問題解決的な学習過程を効果的に取り入れていけるよう、積極的に検討し実践していく必要があると考える。

(実践事例3)

視点3 家庭や地域と連携し、学んだことを生活に生かすための支援の工夫

渋川市立橋小学校 田子佳江

1 研究の視点

家庭科の学習で身に付けた食に関する知識や調理技能を実際の生活に生かして日本の伝統的な食生活を大切にしていこうという心情を身に付けさせるためには、家庭や地域との連携が欠かせない。児童の実践への意欲を継続させるために、自分自身の生活を見直し、課題を見付け、比較検討して解決方法を考え、計画を立てて課題を解決させ、振り返り活動をさせていく。

2 課題解決のための手立て

(1)家庭や地域へ働きかける意識を高める工夫

各家庭の実態を調べる家庭学習の結果を基にして、自己の生活を見つめ課題を見付けて、自分自身の家庭生活を学習内容と結びつけて意欲的に学習に取り組めるようにさせる。また、学習したことを基にして自分たちで考えた成果を保護者に伝え、各家庭での実践に結び付ける。その際、家庭での実践の場を意図的に設けて、学校での学びと家庭生活の融合を図る。

(2)家庭や地域とつながりをもつための工夫

学習の成果を学校全体や地域に広げることで、学習が自分たちの生活に結びついていることを実感させて、更なる実践の意欲を養う。

3 授業実践 題材名「食べて元気に」(5学年)

(1)自分の食生活を振り返る

本実践を行うにあたり、まず始めに児童は、自分自身の食生活を見直す活動を行った。学校中のみんなが楽しみにしてる毎日の給食の献立や、自分自身の家の食事の献立を振り返ったところ、和食の基礎である「ご飯」と「みそ汁」の登場回数が多いということに気付いた。そこで、自分の家にある「みそ」や一週間の食事で食べた「みそ汁」について調べ学習を行った。さらに、「みそ汁」の実やだしの種類、実の入手先などにも範囲を広げて調べ学習を行った。その結果、どの家庭でも少なくとも1日1回は「みそ汁」が食卓に上っていること、「みそ」は市販の「信州みそ」を使っている家庭が多いこと、「手作りみそ」を食べている家もあること、汁の実は、自家栽培の旬の野菜が中心となっていることなどが分かり、自分たちの食生活の中に、「みそ汁」は欠かすことのできないものであることを実感することができた。そして、こんなにも身近なメニューである「みそ汁」についてさらに詳しく学習していこうという意欲をもつことができた。

(2)保護者・栄養教諭とともに学ぶ授業の展開

時 間	主な活動 (全11時間)	☆栄養教諭の関わり
1	・自分の食生活をふり返り、課題を設定する。	
2	・米、ご飯の炊き方について学習する。	
3・4	・調理実習 (ご飯を鍋で炊く)	
5・6	・「だし」と「みそ」について知り、「だし」のとり方を実践する。 ☆「だし」について 一煮干し・かつお節・昆布・顆粒だし	
7	・各家庭で調べた「わが家のみそ汁調べ」について発表する。	
8 (授業参観)	・グループでオリジナルみそ汁の実を考える。 ☆栄養素、旬について 「オリジナル〇〇〇汁を作ろう」	
9・10	・「基本のみそ汁」の調理実習をする。(実：長ネギ+油揚げ)	
冬休み中	・「わが家のみそ汁」作りの実践をする。	
11	・実践発表会をして、地域への発信の準備をする。 ☆レシピ・チラシ作り	

(3) 家庭との連携を図った実践（冬休みの課題）



図1
みそ汁作り
実践カード

(4) 栄養教諭との連携を図った実践

12月の授業参観を経て、1・2月の給食の献立に、5学年の児童が考案した「みそ汁」を基にした橘小のオリジナルみそ汁を実際に4種類取り入れてもらい、校内放送で紹介し、全校児童に食べてもらった。



図2 給食室の前の給食黒板



図3 当日の給食

(5) 地域との連携

給食に出してもらった中で好評だったメニュー「ほしいね汁」のレシピを児童のおすすめの言葉とともにプリントして、児童の祖父母あてに配付したり、学校裏にある町の公民館に置いてもらったりした。また、下に感想欄を設けて返事をもらうことにした。

4 成果と課題

(1) 成果

- 学習参観でみそ汁の実を考える授業を行ったことが家庭への啓発につながり、保護者から、「食生活について家でも見直してみたい。いい機会を与えてもらった。」などの感想を得ることができた。
- 実際の給食のメニューに採用してもらったり、地域の方へも紹介したりするなどの実践を通して、自分たちの学習が他者へも広がり、自分自身のこれからの生活にもつながるものであることを実感して、食への関心を高めることができた。

(2) 課題

- 家庭や地域との連携については、まだまだ工夫の余地がある。公民館活動やPTA活動の中にどのように組み込めるかさらに考えていきたい。また、頂いた感想を基にさらに工夫を重ねていきたい。

Ⅲ 成果と課題

1 研究の成果

<視点1>課題に気付くための支援の工夫

- 導入時に身近な生活の問題に気付かせる場面において、自分たちが選んだ料理の写真を使うことによって、自分たちの問題として本題材に課題意識を持って取り組むことができた。
- 題材構成の最後に、家庭での実践を位置付けた題材を貫く課題を児童の言葉で設定し、そのための課題解決の方法を考えて学習計画を立案することで、学習の目的意識が明確になった。
- 題材を貫く学習課題を、給食や修学旅行のビュッフェの写真など身近な食事を取り上げ比較しながら考えたりする活動をすることで、より自然な流れで、児童は自分の食生活の課題に気付くことができ、児童から学習課題につながる言葉を引き出すことができた。(学習指導案 6 学年より)

<視点2>問題解決的な学習過程の工夫

- 児童と共に題材の学習計画を立てることで、ゴールを見据えて学習に意欲的に取り組むことができた。また、全体でアドバイスをし合う、練り直しをする、繰り返し取り組むことで段階を追って着目する観点を増やす等もでき、栄養面だけでなく色どりや旬の食材・身近な食材の活用など、基礎・基本的な知識の習得もより向上することができた。
- 題材を貫く課題を考えたり学習計画を立てたり、調べたり、振り返って次に取り組むべきことを考えながら進めることによって、「自分たちで考えた」「自分たちで解決した」という思いを持つことができ、それによって次の学習に主体的に取り組むことができた。
- 地域ボランティアなどの人材を活用することによって、技能に不安のある児童に対応するとともに、児童の技能の習得を向上させることができた。

<視点3>家庭や地域と連携し、学んだことを生活に生かすための支援の工夫

- 題材構成の最後に「家庭での実践」を位置付けたことによって、児童自身の家庭生活に関心をもたせ、家族の一員として家庭科で学んだことを日常生活で活用して、生活をよりよくしようとする意欲の向上につなげることができた。
- 「家族に学習した料理を振る舞う」の課題を出し、出きばえをチェックしてもらったり、コメントをもらうことで、児童の満足感や達成感を高め、学校での学びを生かして家庭でも楽しく食事作りをするなどの実践力を高めることができた。
- 栄養教諭や地域の公民館と連携を図ることで、自分たちの学習の広がりを実感でき、更なる意欲の向上につながった。

2 今後の課題

- 「問題解決的な学習」の構成では、児童が、自分や家族の生活の中から問題を見い出させるよう、他の領域においても実生活との関連を図った問題解決的な学習過程を効果的に取り入れていけるよう、積極的に検討し実践していく必要がある。
- 学習形態として、グループでの話し合い活動を取り入れる場合は、話し合いの視点を提示したり、一定の条件を設けたりして、論点が広がりすぎないようにする必要がある。また、その視点や条件をどのように定めるかによって、学習の方向性が大きく変わってくるので、吟味する必要がある。
- 調理支援ボランティアなど地域の支援の人材をお願いすることによって、児童に実生活に生かせる知識や技能の習得に大きな効果があった。各校で、地域や保護者の学習支援ボランティア人材を募って各領域において積極的に活用するようにしたほうがよい。

研究同人

〔平成30年度〕

校長	一倉加寿江						
教諭	磯田 文絵	青梅麻里子	高橋 裕子	濱田 光恵	木暮 陽子		
	中澤 美樹	重田 祐子	内海 弘恵	角田 真一	三枝美津乃		
	奈良 紀子	上ノ内深幸	本田 知子	田子 佳江	清水 洋美		
	植木真紀子	柳岡恵里子	高橋 浩子	戸塚 順子	奥村 美佳		

〔平成31年度（令和元年度）〕

校長	都丸千寿子						
教頭	三俣 利明						
教諭	佐藤 正美	並木 広美	高橋 裕子	濱田 光恵	小淵由美子		
	小田切果奈	重田 祐子	内海 弘恵	荒井 尚美	小林偉久江		
	生方佐知子	須田 美紀	田子 佳江	南 洋美	飯塚めぐみ		
	植木真紀子	高橋 浩子	戸塚 順子				
授業実践校	(授業者)	野村 聡太					
	(授業者)	篠原 愛莉					

第53回 群馬県小学校家庭科教育研究発表大会

発行 令和元年10月24日
発行者代表 群馬県小学校中学校教育研究会
小学校家庭科部会 会長 三好 玲子